

# 精神的に不安定になった移植待機患者の支援

Support for long-term waiting patients and the families for liver transplantation

クリニカルコーディネーター 草深仁子

信大保健学科 鈴木泰子

**要旨** 約1年という長期の待機期間において、精神的に不安定となった16才の患者にとって、①待機期間の長期化が予測された早期からの支援を開始したこと、②患者と母親、ドナーの姉、それぞれと1対1で話を聴く姿勢を持ったこと、③それぞれに合ったコミュニケーション方法での支援を行い、それぞれを支持していく姿勢を伝えたこと、④患者の対応には患者が定期的を受診していた子どもの心診療部と連携した対応をとったこと、⑤ドナーの気持ちを仲介となって伝えたこと、が有効な支援であったと考えられた。

**キーワード** 肝移植患者 精神的不安定さ 患者・家族支援

**1. はじめに** 生体肝移植待機中の患者は、生命への危機感やドナーから臓器を提供してもらうことへの罪悪感等さまざまな不安や葛藤の中で過ごしている。今回移植まで約1年という長期の待機期間が必要となり、この間に精神的に不安定となった患者との関わりについて検討を行った。

## 2. 事例紹介

Aさん（初診時16歳、通信制高校生、3人姉妹の末っ子）

**現病歴:**生後133日目に葛西手術施行。術後減黄良好で生活上の制限なく外来通院を続けていたが、13才からビリルビン値が徐々に上昇し、15才ではT-Bil値が12.2mg/dlとなり、姉をドナーとしての生体部分肝移植を希望された。胆道閉鎖症に対し待機的生体肝移植の適応があると診断されたが、ドナー予定者の事情から約1年間の待機を要した。

**性格・その他:**家族は本人の性格を、外交的でおおざっぱとらえている。本人にとってキーパーソンは姉であり、母親はAさんの精神的な不安定さを受け止めきれていない。ドナーである姉は移植について、「Aちゃんは、小さい頃から病気をして可愛そう。自分の肝臓を上げて良くなるものなら、何とかしてあげたい。（自分の身体に残る）傷については気にしない」と語っていた。

### 3. 倫理的配慮

研究目的・プライバシーの保護について、本人と母親に説明し同意を得た。

### 4. 看護の展開

#### <初診時>

「現在の病状についてよくわからないが、肝硬変が良くならないなら移植したい」また、同級生から黄疸についていじめを経験しており「私だけがどうしていじめられるのか、どうしてお姉ちゃんは元気で私は病気か」との言動があり、肝硬変からくる身体的変化についての現状を受け入れられていない状態だったが、回復が望める肝移植への期待も表していた。この時点で、生体肝移植のほか脳死登録について、また血液型不適合の移植についても説明を行った。待機期間の長期化も予測されることから、継続的支援が必要であると判断された。

#### <受診1ヶ月後>

「精神的に不安定になっている。早く移植ができるように検討してほしい」と母親から連絡があった。Aさんに連絡すると「何もやる気がおこらない。手術も嫌、死にたい。自分が移植を希望しなければ、大好きなお姉ちゃんを傷つける事もない」と不安定な状況を語った。子どもの心診療部の受診予定を早める対応をとった。子どもの心診療部でのカウンセリングによって、本人は手術ができるか否かの不安から焦燥感が強く、手術拒否は一過性のもので、移植手術の不安に伴う、反応性抑うつ状態にあると判断された。また、母親からしっかり支持してもらっていないことによるアイデンティティの障害があることも評価されたが、カウンセリングの進行に伴い、精神的安定がみられるようになった。このころから、電話での定期的に連絡を開始。母親に対しても本人とは別に支援していくことを計画した。また、移植時期を早めるために、他院への紹介を検討することとした。

#### <初診から2～9ヶ月後>

15.7mg/dlまで上昇していた T-Bil 値が、5mg/dl台まで低下し、肝機能の改善がみられた。体調の安定に伴い当初の頃の言動を自ら振り返る余裕も見られるようになり、「母親を困らせようと思い、『死にたい、手術も嫌』と言っていた」と話せるようになった。急激に病状が悪化していく不安から開放され、落ち着きをとり戻せた時期であった。こうした本人に対して電話での連絡は継続し、<引き続きいつでも連絡を待っている><心配している>というメッセージを伝えるように心がけた。

#### <移植日程が決まった術前4ヶ月>

受診時、無数の浅いリストカットを認めたため、別室で時間を取り 1対1でゆっくりと話を聞いた。「大好きなお姉ちゃんを傷つけてまでして、移植をして良いのか？」とドナーに対する罪悪感からの

発言が聞かれた。子どもの心診療部からは、「不安定な自分自身に嫌悪感を持ち、そうした自分を懲らしめることで安心するような状態であるが、本当に死のうとは思っていない状況」とのこころの状態の評価を受けた。

こうした不安定な状況の本人に対して、ドナー予定の姉が以前話してくれた「Aちゃんは、小さい頃から病気をして可愛そう。自分の肝臓を上げて良くなるものなら、何とかしてあげたい」という言葉を伝えた。姉の気持ちを改めて確認できたことから、本人は非常に喜び、移植を受けようとする自分に対する肯定感を持つことに結びついていった。

これ以降の対応として、本人に対して、(1)外来受診時には別室で1対1で話を聴く、(2)外出がちで直接的な連絡がとれにくいいため、定期的に電子メールでのコミュニケーションをとる、(3)同世代の移植経験者を紹介する、母親に対しては、(4)定期的な電話連絡をする、ことを行った。本人からは徐々に移植を受け入れていく姿がみられた。

#### <移植3～2ヶ月前>

一旦やめていたリストカットが再度みられ、本人の希望もあり一時的に精神科に入院し、退院後には母親から「不安・イライラ時に食べて吐くことを繰り返したり、タバコを吸ったりして気を紛らしている」との情報も聞かれた。Aさんは、「夜が来るのが怖いので、誰かそばにいてほしい」「友人と夜遊びすると、イライラ感がない」とその都度自分の気持ちを表現したメールを送ってきた。肝移植のための入院日が明確となってきた本人が、不安焦燥感が増していることが考えられた。

喫煙や夜間外出など手術前には控えてもらいたいことは多くあったが、子どもの心診療部の方針と同調して、禁止項目を減らして本人が安定感が得られることを最優先して対応した。

ちょうどこの時期に移植患者会が開催されたため、同世代の移植患者からの話を聞いてもらい、母親、Aさんともに安心感が得られた。

#### <移植前後>

ドナーの姉と同室の入院となり、互いに冗談を言って表情も明るく、落ち着いていた。術前後は特に問題となることもなく、精神的に安定していた。毎日訪室し不安や疑問点についての対応を行った。

## 5. 考察

今回有効だった支援として、①待機期間の長期化が予測された早期からの支援を開始したこと、②患者と母親、ドナーの姉、それぞれと1対1で話を聴く姿勢を持ったこと、③それぞれに合ったコミュニケーション方法での支援を行ったこと、④それぞれを支持していく姿勢を伝えたこと、⑤

また患者の対応には患者が定期的に受診していた子どもの心診療部と連携した対応をとったこと、⑥ドナーの気持ちを仲介となって伝えたこと、が考えられた。①については、いったん移植を受けると意思決定した家族であっても、気持ちを何度も再確認することになるので、待機期間が長期化すればするほど、気持ちが何度も不安定になることは予測に難くないので、できるだけ早期から支援を開始して家族の気持ちに寄り添うことが有効であったと考えられた。②と③は、それぞれの状況や気持ち、適切なコミュニケーション方法も異なっていたので有効であったと考えられる。特に自分の気持ちを人に伝えにくい青年期の患者には、気楽にそのときの気持ちを表現できるコミュニケーション方法として、電子メールが有効であると考えられた。④は不安定な状況にある対象に対して常に安定した接し方を継続的に行うことが、本人たちの安定にもつながっていったと推察される。これは⑤とともに、不安定な精神的状況の人々と継続して安定した関わりや支援を実施していく上で、ケア提供者側もこころのケアの専門家との相互支援が必要であることにも結びついていると考えられる。⑥に関しては、実際にドナーがレシピエントを心配する気持ちについて家族だからこそ伝わりにくいことも多いので、改めて医療者が両者の仲介をしてそれぞれの気持ちを伝えたことが支援として効果的だったと考えられる。

## 6. 結語

青年期の肝移植待機患者は、自ら移植の必要性について理解しているからこそ、移植手術に対する不安やドナーへの罪悪感を抱くことがあり、精神的に不安定になりやすいが、適切な介入によりアイデンティティの確立が促進される。患者と母親それぞれへの早期からの定期的な連絡といつでも相談できる関係を作りあげていくことが支援上重要である。

## 参考文献

1. 福西勇夫：臓器移植のメンタルヘルス， p 24-28. 中央法規， 2001
2. 福西勇夫：先端医療とリエゾン精神医学， p 65-73. 金原出版， 1999
3. 春木繁一：透析か移植か， p 41-63. 日本メディカルセンター， 1997

## 資料

### メールの1例

<Aさんより>

今、B（ドナー）が検査入院していると思うと自分が悪いんだって考えちゃって、とても自分が許せなくて、どう謝っているかわからないです。手を切ると楽になれるのに、親が悲しんでどうすればいいかわからないです。（中略）このメールは親には内緒にしてください。電話とてもうれしいです。

<返事>

Aさんメールありがとう。毎日お姉ちゃんのことです苦しんでいることは、辛いことだと思います。移植する人たちは皆おなじような思いをいだきつつ、がんばっていることだと思います。けっしてAさんだけではないよ。手を切るのは、Bさんにも辛い思いをさせてしまうかも……。いろいろな人にメールしたりして、辛い思いが少しでも軽くなるといいんだけど……。メールもらってうれしいヨ。草深